

金賞 小学生の部

お母さんの笑顔

静岡市立田町小学校 五年

石津 はる

私のお母さんは、かんごしさんです。お母さんがしていることと全ては分かりませんが、お母さんはとってもかっこいいこと、お母さんの笑顔はみんなを救っていることは分かります。

これは、私が四才の時です。お母さんが働いている病院に、私は入院することになりました。四才の時の事だから一人じゃ不安でした。でも、お母さんは毎日のようにお見まいに来てくれました。それに、いつもずっと笑っていて、心配している顔や悲しんでいる顔は一回も見せませんでした。だから私は一ヶ月位入院していたけど、とっても心強くて、ずっとがんばっていられました。家族みんなが休みの日にも来てくれて、たくさん話したのを覚えています。

私はお母さんと二人で病院に行った時、よく入院している人

の様子を見に行きます。その時、お母さんの顔見知りの人と話します。お母さんは、

「こんにちは。お元気ですか。」

そう聞きます。そして、

「元気ですよ。」

などと元気そうな顔をして返事をしてくれると、お母さんは、本当にうれしそうに顔をします。かんじゃさんのことでは、がんばろう、うれしいなどと、そういう事を思えるってすごいなあと思います。きっとその時のうれしそうに笑顔や、私にしてくれたような笑顔がかんじゃさん達を救っているんだ、とさらに思いました。私も、お母さんが笑顔でいてくれるとうれしいです。だから私も笑顔でいます。これも、私にできる「親切」なのでしょうか。

「大人になったら」ではなくて、「今から」お母さんがしてくれたような、みんなを救ってくれる笑顔ができるようになりたいです。たくさんの人に笑顔になってほしいし、元気になってほしいから、お母さんみたいな人になりたいです。一度に大きな親切ができなくても、何度も何度も小さな親切をくり返して、大きな親切にするのがお母さんの「親切」です。私もたくさん「親切」をみんなにとどけたいです。お母さんを目標にして、いつか「ありがとう。」と心の底から言ってもらえるように、

いつも笑顔で、色々な人に親切にして、お母さんみたいなカッコいい人になりたいです。

教室の中はポジティブいっぱい

静岡市立田町小学校 五年

大石 胡花

教室の中は、色々なポジティブがたくさんおきる場所です。ポジティブとは、私たち五年生がやっている「みんなのために自分で考えて行動する。」ということをやることです。そのポジティブをもっとふやすために、『ポジティブ日記』というものを毎日書いています。その日記に書く内容は自分のしたポジティブ、友だちのやっていたポジティブなどです。

そこで、今までに自分がしたポジティブ、友だちがしていたポジティブをふり返ってみたいと思います。

まず、自分のしたポジティブ。私がよくやるのは、次の五つです。一つ目は、プリントやノートを配ったり、配るのを手伝うことです。帰りの会に配る量はたくさんあるので、積極的にやっています。二つ目は、その時に必要なものを用意すること

です。「次は、くをするからくが必要だな。」と考え、色々なものを用意します。三つ目は、ポジティブなことをしている人を見つけ、まねすることです。もっとポジティブなことをたくさんするために、「これはいいな!」と思ったことは、まねしたり、手伝ったりしています。四つ目は、授業で積極的に発言することです。あまり発表が得意ではない子も発表しやすいクラスにするためには、手を挙げている子がいるということが大切だと思います。なので、自分が分かっているかぎりは、いつも手を挙げようと思います。五つ目は、教室におちているゴミを拾い、ゴミ箱にすてることです。自分のゴミではないけれど、拾ってすてています。教室にゴミがおちていると、授業にも集中できなくなってしまうし、そうじの時に大変になってしまいます。私も、教室がピカピカだったら、授業にとっても集中できます。

この五つのことは、いつもやることを心がけています。そして、ポジティブなことをする時は、その相手のことを考えてやるので、ポジティブ日記には「きつ」という言葉を使って「たぶん相手はこんな気持ちになったと思う。」ということを書きます。

次は友だちのやっていたポジティブで「すごい」と思ったポジティブ。それは、同じ委員会の子が毎日十五分も前に委員会の活動に來ていることです。いつもそれを見て、「とてもやる

「気があるなあ。」と思いました。早く活動場所に行くと、活動できる時間が長くなり、活動時間の中でできることが多くなると思います。私も五分前行動を意識しています。

やはり、教室の中は、毎日色々な、そしてたくさんさんのポジティブがあふれています。そんなたくさんさんのポジティブ、親切がたくさん集まると、やさしさがあふれるクラスになって、クラスのためあの、『みんなで協力、みんなで全力、みんなでやさしく』のめあてが達成できると思います。このポジティブな行動は学校だけでなく、バス、小さな子、公きょうしせつなど、色々な所でしていきたいです。

祖母がこの世を去っても

学校法人星美学園静岡サレジオ小学校 六年

木戸 愛介

ぼくの祖母は、四年前ガンで死んでしまった。ガンが見つかった時は、いろいろな所に転移していて何もすることができなかつた。あつという間に天国へ旅立ってしまった。

祖母はとてもやさしい人だった。ぼくをいつもひざの上に座

らせてくれて、ずっといっしょにいた。いろんな事を教えてくれて、たくさん工作もした。お料理も歌も上手だった。ぼくだけではない。みんなにやさしかった。近所の人、親せき、家族。自分のことをぎせいにして、みんなのことをサポートして、一生けん命生きている人だった。親切だったので、祖母をしたう人が多い。今でもみんなが思い出話をしてくる。

ぼくは、学校での行き帰り電車を利用している。駅までの間に、たくさんさんの近所の人と会う。

「あいちゃん、おはよう。元気？」

「あいちゃん、暑いね。大丈夫？」

「あいちゃん、おかえり。今日は学校どうだった？」

「何してきたの？」

「いつから夏休み？」

みんなが声をかけてくる。帰りだとお菓子をくれる人もいる。下を向いて歩いていると、

「あいちゃん、どうしたの？学校で何かあった？おばさんに話してみな。」

と心配してくれる人もいる。ぼくは、正直うるさいなと思っていた。

けれども、ぼくはこの前気づいた。近所の人達は、祖母の代わりにぼくを心配してくれてるんじゃないかと思ったのだ。一

人のおばさんが、

「あいちゃんのおばあちゃんに本当にお世話になったんだよ。なんでも助けてもらったんだよ。いい人だったね。死んでしまった事が未だに信じられない。その辺からひよこつと出てきそうだよね。」

と言ってきた。今でも祖母のことを思い出し、感謝してる人があるのだ。よく考えたら、祖母がいなくなってもぼくの周りにはいつも人がいる。困った時も楽しい時も、いつも周りに人がいる。ぼくは、みんなの親切に囲まれて生きているんだと気づいた。祖母が生きていたらきつとぼくを心配するだろう、声をかけてくるだろう。でももうできないから、代わりにみんながしてくれるんじゃないかな。と思った。周りの人は、祖母が早くに死んでしまったからかわいそうだと思ってくれるのかもしれない。それもとてもありがたいことだと思う。もっと考えると祖母が、みんなにした親切が今、ぼくにかえってきているのかもしれない。だからぼくを気にして声をかけてくれる。ぼくは心から、祖母にも周りの人達にも感謝したいと思った。



金賞 中学生の部

次は

富士市立田子浦中学校 一年

佐野 碧

「あの手を取っていれば」

忘れることの出来ない、後味の悪い思い出。

私は小さいころからサッカーを続けており、今は、中学校のサッカー部に所属している。サッカーはゴールばかりが目されるが、ゴールするためには、まず相手からボールを奪う必要がある。そのため、チャンスと思ったら、相手の懐に勢い良く飛び込んでいく。衝突し、どちらかが転倒することもあるのだが、ファールとは限らない。審判が笛を吹かなければ、そのまま何事もなかったかのように試合が進む。

今も悔やんでいる出来事は、小学校の時のことだ。その日の試合は、勝ち残りかけた大一番だった。私は思うようなプレーが出来ず、イライラしていた。試合終盤、相手チームの選手と

接触し、私は転倒した。私の自爆だった。勝手に突っ込み、勝手に転んだ。もちろんファールではなく、試合は続いた。その選手とは一緒に練習や、同じチームで試合に出場したこともある。転んでいる私に、その選手は手を差し伸べてくれた。でも私はその手を取らずに、自力で起き上がり、話をするのもなく試合に戻った。この行為はスルーと言われている。相手の思いやりを無にする行為であった。ただ手を取らなかったのではなく、取りたくなかったのだ。明らかに試合は相手ペースで、中心にその選手がいた。だから自分がその選手より劣っていて、負けを認めてしまうような気がして嫌だった。

試合終了後、目を見て握手をすることが出来なかった。こんな私に勝てるわけがなかったのだ。上手い、下手の問題ではない。試合の前から結果は決まっていたのかもしれない。モヤモヤしていたが、コーチの、

「その気持ちを忘れるな。次は、君が手を差し伸べろよ。」
で、気持ちを切り替えることが出来た。

中学生になり、その選手が部活ではないカテゴリーでサッカーを続けていることを知った。もう「次」はないのかもしれない。でも違う選手との「次」は、手を差し伸べる・手を取ることを心がけている。少しずつではあるが、自然に、意識することなく、出来るようになってきていると思う。その時に言わ

れる、

「ありがとう。」

が、少し照れくさくて、聞こえなかったふりをしてしまうのが、これからの課題だ。

「次」を信じて、サッカーを、そして思いやりの気持ちを忘れずに続けていきたい。彼にしてみれば些細なことでも、もう覚えていないかもしれない。それでも、私は色々な意味をこめて「ありがとう。」と言える日を楽しみにしている。



応援

静岡県立浜松西高等学校中等部 三年

鈴木 彩里

私は、中学校に入学してから二年半、陸上部でハードルを練習してきました。陸上部に入学して初めて大会を見に行った時、力強く競い合う選手や、各学校の熱気あふれた応援に圧倒され、鳥肌が立ちました。そして、私は毎日の練習に励みました。ハードルは、思っていたよりも難しく、奥深い競技でした。身長が低い私は、ハードルとハードルの間を三步で走れず、丸一年苦戦しました。でも、辛い時も周りの人達が応援してくれる事で、諦めずに頑張る事が出来ました。陸上は、個人競技だと言われていますが、私は違うと思います。きつい練習も、仲間と互いに応援し合う事で、乗り越える事が出来るからです。

二年生になり、私は大会で初めて決勝に進む事が出来ました。その時、他校の先輩が、

「決勝、頑張ってね。」

と声を掛けてくれました。その先輩とは話した事も無かったため、驚きつつも、とても嬉しく、力がわいてきました。先輩は、

毎回決勝に進んでいましたが、引退試合になるこの大切な大会で、予選落ちしてしまったのです。それなのに、他校の私を応援してくれました。私は、今まで自分の学校以外の人を応援するという考えがありませんでした。きっと、先輩はハードルを一生懸命やってきたからこそ、同じハードルの仲間という広い視野で、私を応援してくれたのだと思います。私は、この先輩の心の広さと強さに驚きました。もちろん、順位にはこだわり、向上していきたいのですが、それだけではなく、もっと大切な事を、私は先輩との出会いで気付く事が出来ました。私は、応援の力の大きさを実感し、先輩のように広い心の輪を持って、人を応援出来る人になりたいと強く思うようになりました。

人が人を応援する心はとても大切で、世の中を明るく元気にします。道に迷っている人に声を掛ける。バスや電車で席を譲る。災害が起きた時、ボランティアで現地に行ったり、募金活動をする。これらは、人が人を応援する気持ちから生まれるものです。

一人一人が、沢山の人に応援されています。私は、これから人と人とが応援し合い、助け合いながら生きていく世の中でありたいと思っています。そのために、皆で人を大切に思う心の輪を広げていきましょう。

ホストファミリーと過ごした誕生日

学校法人星美学園静岡サレジオ中学校 一年

星野 杏奈

信じられない。今日が私の誕生日だなんて。ここはオーストラリアのバーンズデール。まさか、十二歳の誕生日を海外で過ごすとは。

六年生の秋、私の学校ではオーストラリアへ修学旅行に行く。姉妹校であるセントメアリー小学校に通う生徒のお宅に、ホームステイをさせて頂くという貴重な体験をすることができた。初めてホストファミリーと会った時、

「Nice to...meet...you.」

と、戸惑いながら発した言葉はそれしかなかった。その後は、「Yes」「Thank you」の繰り返し。しかし、ホストファミリーが私達を本当の家族として接してくれていると気づき、自分の持っている英語力で話そうと努力した。カチカチだった体も少しずつ解けてきた。そして、ついに。

ホームステイをして四日目。その日は私の誕生日だ。まさか、十二歳の誕生日をオーストラリアで過ごすとは、想像もしてい

なかった。私は嬉しい気持ちと、少しがっかりした気持ちがあった。ホームステイ先で誕生日を迎えることはめったにない経験だ。しかし一年に一度の誕生日に、家族と一緒に過ごす事ができないと考えると少し寂しい。とても寂しい。複雑な気持ちだった。しかし、リビングに行くとその様な気持ちは吹き消された。ホストマザーが元気な笑顔で、

「Happy Birthday Anna!」

そして私、

「Th……Thank you very much!」

と、びっくりして答えた。双子の子供たちから誕生日カード、可愛い文房具の入ったプレゼントをもらった。誕生日カードには漢字やひらがなが並べられ、所々間違っていたが、そんな事はどうでもよかった。とにかく私は嬉しかった。感動した。一生懸命に書いてくれた誕生日カードは、一生の宝物になった。

そして夜。リビングは、バルーンやクラッカーが飾られて華やかになっていた。私の誕生日会だ。驚きと感謝の気持ちが溢れた。さらに、ホストマザーは私の母に国際電話を繋げてくれた。ホストマザーは、

「きっと私が Ana のお母さんだったら、あなたの声を聞きたいと思うから。」

と。私は久しぶりに母と話せて嬉しかった。母も私の元気な声

を聞いて安心した、と言っていた。私はホストファミリーの親切さや温かさ、そして私の母への気遣い、全てに心を打たれた。私達の為に尽くしてくれたホストファミリー。本当の家族として接してくれた。感謝をしきれない程、私はたくさんのお親切を受けた。

ホストファミリーと過ごし、お別れの日の朝。今日は日本に帰国する日だ。ホストファミリーは、私達を抱きしめてくれた。いつのまにか私は涙を流し、

「Thank you. Thank you.」

と繰り返していた。始めは不安もあったが、友達と協力し、そしてホストファミリーも、私達の言葉に優しく温かい心で耳を傾けてくれ、心が通じ合うことができた。

このような貴重な経験をし、私はさらに英語を頑張ろうと決心した。大人になってホストファミリーと再会する機会があるとしたら、私の成長を見てもらいたいから。

銀賞 小学生の部

みんなの親切

静岡市立田町小学校 六年

青野 小春

これは、家族で東京に行ったときの話です。

わたしは、家族といっしょに電車に乗っていました。二〇分くらいして、おばあさんが電車に乗ってきました。すると、お父さんがさっと席をゆずっていました。おばあさんは、

「ありがとうございます。」

と、言って席にすわりました。

その次の日も、電車に乗っていました。次の駅でにんぶさんが乗ってきました。男の人がにんぶさんに、

「よかったらすわってください。」

と、さっと席をゆずっていました。とても自然に声をかけて席をゆずっていたので、すごいなあと思いました。

次の駅では、小さな五さいくらいの子と赤ちゃんをつれた人

が乗ってきました。するとにんぶさんのむかひにすわっていた人が席をゆずりました。

わたしは、きつと、さつき男の人が席をゆずるのを見て、自分もゆずろうと思ったんだらうなと考えました。

そこで、わたしは自分も席をゆずろうと考えました。そして、また別の日に電車に乗りました。少しすると、大きな荷物を持った人が乗ってきました。わたしは、

(だれか席をゆずる人はいるのかな。)

と様子を見ていましたが、だれもゆずっていないかったので思い切って、

「あの、ここ、すわりますか？」

と、声をかけました。

「ほんとに！ありがとうございます。」

その人は、笑顔でお礼を言ってくれました。わたしはいつもより、少しだけほこらしい気分でした。

わたしは、その人が持っていた紙袋がとても大きかったので、

「今日、何かあるんですか？」

と、聞いてみました。

「今日はね、母のたん生日でほしがっていたものを買ったんだけど、おもくてね。席をゆずってもらえてほんとによかったわ。」

と、うれしそうに答えてくれました。

そうやっておしゃべりしているうちに駅につきました。わたしは、ねていたお父さんとお母さんを起こして電車をおりました。

電車の中では、スラスラと楽しくお話することができました。

電車を出ると、また知らない人同士の気がしますが、電車の中では、知らない人にも親切にできる気がします。

今日もきつと電車の中では、小さな親切が起こっていると思います。

(また親切にすることができかな。)

と、思うとちょっとワクワクします。

車いすから幸せの輪を広げよう!!

静岡市立新通小学校 五年

見城 紅羽

私の祖母は、車いすに乗っている。私が遊びに行くと、祖父

母はともかんげいしてくれて、一緒に宝探しゲームをしたり、

買い物や外食に連れて行ってくれたりする。行った先の飲食店は、自動ドアは意外にも少なく、だいたい大きな重いガラス戸が付いていて、車いすを押しながらドアを開けるのは実に大変だ!!祖父が祖母の車いすを押し、母と私がガラス戸を開けるパターンが多いが、中には、見ず知らずの人が戸を開けてくれる時もある。出入りを待って、祖母を優先してくれる人も多い。私は、これまでそんなシーンを何度か経験したが、心の中の電球がパツと明るく点いた。祖母のために、知らない人が加わってくれた優しさを感じたからだ。

四年生の時に、福祉の授業で、しょう書を持つ人がどのような事に不便さを感じるのか勉強したが、実際にしょう書を持つ人の手助けがサツと出来るかと言うと、勇気がある事かもしれない。

以前、スーパーで車いすに乗った人が、たなの高い所を見て食品を選んでくれた。私の祖母を助けてくれた人達のように、「何か取りますか?」と声をかけてみたら、「どうもありがとう。」と喜んでくれた。私の心の中の電球が再び光った。

一方、こんな事もあった。電車に乗っていた時、おばさんかな?おばあさんかな?と見た目で年れいを判断して、失礼だと思われたらどうしようか。と、結局、席をゆずらず、電車を降りた後も、何だか心の中がザワザワした。

親切とは、相手の気持ちを考え、その人の立場に立って考えてみる事だと思う。けれど、親切が、時にありがたみいなくなる事があるかもしれない。私がしてもらってうれしい事が、必ず相手も喜ぶ事ではないかもしれない。

哲学好きな祖父がこんな事を言っていた。「親切は『親接』と書いて、親しく接するの方がいいよね!!」私は、なるほど!! と思った。

私の本がなくなった時、心配してくれた友達が、「明日、一緒に探すよ!! 見つかるといいね!!」とはげましてくれた事がとてもうれしかった。友達が私の立場になって考えてくれた『親接』だからだ。

私も、何かこまっている人を見かけたら、勇気を出して声をかけてみようと思う。小さな親切が大きなかけ橋となって、世界中の人々の心の電球がパツと光ったらステキだなあと思う。

ありがとうの花

富士市立富士第一小学校 五年

望月 瑠七

私の家の庭で、今年も赤いほうせんかの花がさきました。この花がさくと夏が来たのを感じて、あたたかい気持ちになります。

三年生の時、理科の授業でほうせんかを育てました。夏休み前にはぐんぐん成長して、三十センチ以上の高さになった花を持って帰る友達もいました。いっしょに種をまき学校で育ててきたのに、私のほうせんかは夏休み前、五センチちよつとしか育っていません。葉もなんだか元気がありません。

夏休み中は、ほうせんかの観察が宿題です。

「もしも、かれて育たなかったら、いいよ。」

と、たんにんの先生は言ってくれましたが、観察するためのプリントは数まいあります。一まいも書けなかったらどうしよう、という不安がありました。

夏休み初日から、もう少し日に当たった方が良いかな? 水が足りないかな? と気をつけながら様子を見ました。けれど、家の

庭は学校よりも日差しが強かったらしく、夏休みが始まって五日目位にはすっかりかれてしまいました。夏休みは始まったばかりです。こまっつてしまいました。

私は赤いほうせんかを探す事にしました。家を出てすぐ、ピンク色のほうせんかを見つけました。とてもきれいでした。その後、むらさきや白のほうせんかも別の場所でさいっていました。自分が育てていたのと同じ赤いほうせんかが見つかりません。今ごろ、種から育てるわけにもいかずこまりました。そこでふだん歩かない住たく街まで足を運び探しました。やっぱり無いのかな？とあきらめようとした時、大きな花だんのある家まで来ました。知らない人の家です。花だんの中では色とりどりのきれいな花が何種類もさいっていました。ほうせんかは無いようでした。黄色や白、ピンクの花々をながめました。その時、一つだけ目に留まった花がありました。何種類かの花の中で、たった一つ赤いほうせんかがさいっていました。ドキドキが止まりませんでした。勇気を出して、庭にいたおばさんに声をかけました。宿題に使うほうせんかがかれてしまった事、赤いほうせんかが必要な事を伝えたら、ゆずっていたただける事になりました。

「少し待っていてね。」

と言ひ、庭のおくへ行ったおばさんがもどつてくると、大きな

はちにいっぱいほうせんかが入っていました。たくさんのはうせんかに、うれしさとおどろきで心がいっぱいになりました。「ありがとうございます！」

と大きな声で感謝の気持ちを伝えました。

家に帰ってからほうせんかを植え直し、今まで以上に気をつかい育てました。ゆずっていたいた花を、絶対にからせたくなかつたからです。おかげで、無事に観察する事が出来ました。あの時のほうせんかが種をとばして、今年も家の庭で元気にさいています。夏が来る度、ありがとうございます。



銀賞 中学生の部

行動するために

静岡市立高松中学校 三年

鈴木 万絢

あるバスのでできごとだ。それは、総合学習の一環で行った、市内の高校や寺社を巡る体験学習の帰路であった。夕方だということもあり、バスの中は満員だった。そんな中、小学生の姉妹がバスに乗ってきた。二人共小さく、背中のランドセルが大きく見えた。

バスの空席は、先程降りた客が座っていた一席のみだった。姉らしき子が妹にその席を譲り、姉はその席から少し離れた所に立っていた。姉はしばらく妹の方を心配そうに見ていたが、妹が絵本を読みだすと、少し安心したのか、妹の方を見なくなった。

しばらくバスに揺られていると、あるバス停でバスが止まった。すると、姉はバスから降りた。しかし、妹は自分が降りる

停留所に止まったことに気づかず、絵本を読むのに夢中になっていた。姉は降りてからそのことに気づき、外から妹を必死に探していた。私は、姉妹がいたところから少し離れて立っていたのだが、二人の様子に気づき、声をかけることにした。

「お姉ちゃん降りたけど、降りなくていいの？」

と言ったら、妹は驚いた顔で私を見たが、姉が自分のことを探しているのが窓から見えると、慌ててバスから降りていった。

バスから降りてきた妹を見つけた姉は、一瞬でホッとした顔になり、笑顔となった。姉妹が仲よく帰っていく後ろ姿を見たら、私も安心した。

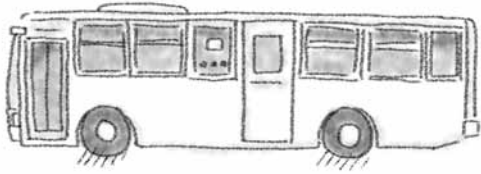
もしあの時、声をかけていなかったら大変なことになったかもしれない。そして、私は後悔しただろう。だから、たった一言だったけれど、声をかけてよかったと思った。

知らない人に声をかけるのは勇気がある。たとえ親切心があったとしてもだ。何か困っている人を見かけても「かわいいぞう。」や「大変そうだな。」等と思うだけで、行動に移すことができないことがあるのではないか。特に自分より年上の相手だと、そのようなことが多いと思う。

では、どうしたらどんな人でも行動に移すことができるのだろうか。

大切なのは相手の気持ちを考えることだ。「かわいいぞう」で

終わらせるのではなく、「もしかして○○だから困っているのかな？私には○○して助けてあげることができそう。」と、自分ができそうなことを考えて、その人に声をかけることだ。できることは小さなことだが、困っている人にとっては、とてもありがたいことかもしれない。私も決して大きなことはできないが、身の周りで困っている人を見つけたら、小さくてもいい、自分のできる範囲で声を出していきたい。そして、行動に移す勇氣を持ちたい。



母の意味のある行動

浜松市立八幡中学校 三年

高見 紗枝

私が、幼い頃からずっと気になっていた事。それは、母のスーパーマーケットでの奇妙な行動だった。

ある時は、なぜか急に立ち止まり、さっと一步横へ移動する。またある時は、目標の商品の少し手前の陳列棚で足を止め、しばらく眺めて「これいいねえ。」等一人言を言う。更に、予定の買い物を済ませレジに向かった時、そのまま真っ直ぐ行けばすぐにレジで会計が出来るタイミングで、何を思ったのか、レジ横に陳列されている飴やガムの物色を始める。結局そこでは何も買わずに、後から来たお客さんの後ろに着く事になってしまったが、母の顔には何故か不快な表情はなかった。そんな母の行動に私は度々呆れ、一緒に買い物をする事に、疲れを感じる事があった。

ところが、私が小学校五年生になり、あるきっかけのお陰で、その母の行動を理解する事が出来るようになった。それは『ビバ、赤ちゃん』という、小学校での活動だった。何組か

の一歳位までの赤ちゃんとお母さんの親子に学校にお越しただき、五年生の生徒が赤ちゃんのお母さんから、育児の大変さや赤ちゃんの成長についてのお話をうかがいながら、赤ちゃんのお世話をさせていただく、という内容だ。一年間で十回程、ずっと同じ赤ちゃんの成長が見られる。おむつや洋服を替えたり、手作りのおもちゃで一緒に遊んだり。泣き止まず大変な事もあったが、毎回赤ちゃんの笑顔に触れるのが楽しみで、時間はあつという間に過ぎていった。活動最終日は、担当させていただいた赤ちゃんとお別れがとても寂しく、またいつか会いたい、と心より願った。そして私の視線は、小さな子供を追うようになった。

それから、いつものように母とスーパーマーケットに行ったある日、私はやっと疑問を解く事が出来たのだった。

そこには、走り回る子、お菓子を選んでいる子、とにかく子供がたくさんいた。「かわいいなあ。」と思って見ていると、またあの母の行動が出たのだ。「あつ、子供を避けた。」母は、少し先からこちらに向かって歩いて来ているお母さんと手を繋いだ子供を、擦れ違わずと前から避けていたのだ。そしてレジに向かう時には、母の少し後ろを歩いていた女の人にレジの順番を譲るように、また飴の物色を始めた。その女の人が通り過ぎる時、私はその人が片手に赤ちゃんを抱きかかえているのに

気付いた。そして、私は母の行動の意味を理解した。

相手に喜ばれる行動が「親切」だと考えていた私は、相手にその行動を気付かれてもいない、この母の行いこそが、本当の「小さな親切」だと感じた。中学三年生になった今、私も周りをよく見て行動し、自分自身が行える「小さな親切」を探している。

私のうけた「小さな親切」

富士宮市立北山中学校 一年

深澤 美加

夏休み直前に、家族旅行で長野県松本市へ行きました。松本市の中心市街は、街歩きが楽しい城下町です。見所やおいしい飲食店が多く、家族三人でいくつかの見所をめぐり、楽しく食事を楽しみました。食後に喫茶をしようと、宿泊するホテルの喫茶店に入りました。

ホテルの制服に長い丈のエプロンを着けた男性の店員さんに、ケーキとコーヒー・紅茶を注文してしばらくすると、小さなテーブルワゴンにコーヒーを淹れるセットをのせて、店員さ

んが私達の席に来ました。そして私に、

「コーヒーを淹れてみますか。」

と、やさしい笑顔で言ってくれたのです。私は、本格的なコーヒーの淹れ方も知らないし、やったこともありません。でも私は、

「はい。」

と、勢いよく返事をしました。なぜなら、私の母はコーヒーが大好きだからです。私は、自分で淹れた本格的なコーヒーを母にプレゼントできる、と思いました。母も、驚きながらうれしそうにしています。私は、店員さんの横に立ちました。店員さんは、穏やかな口調で、私にコーヒーの淹れ方を教えてくれます。どうしてそうするのかも、丁寧に説明してくれます。コーヒー豆を挽いた瞬間、とてもいい香りに包まれました。一杯のコーヒーが上がるまで、私は、小さなテーブルの上に集中していました。その時間も空間も、とても充実していたと思います。そのコーヒーを、母はゆっくりと飲みました。母が大満足であることは、私にもわかりました。コーヒーを飲まない父も、なんだかうれしそうにしていました。

松本民芸家具を基調としたすてきな店内で、てきぱきと働く店員さん。その動きには無駄がなく、とても的確です。コーヒーを淹れるところから楽しませてくれたことは、さりげなく私達

にしてくれた親切だと思います。他にお客さんがいなかったから、とか、もともとそういうサービスだったから、とか、そうしてくれた理由は、探せばあるかもしれませんが。でも、店員さんの思いやりとやさしさは、まっすぐに私達に伝わってきました。

私と母は、ホテルの部屋で、喫茶店の店員さんにお礼の手紙を書き、次の日、ホテルを出るときに、その手紙をフロントに預けました。うけた親切に、心から「ありがとう」と感謝したくなる、こんな「小さな親切」は、心から心への「プレゼント」なのかもしれません。

